

## ～アフリカゾウ「だいすけ」 との出会い～

小 松 守

(秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～名誉園長)



2頭の子ゾウが南アフリカからやってきたのは一般公開前年の1990年の秋だった。秋田市は市制100周年の記念事業の一つとしてキリンとともにゾウを導入し、大森山動物園の整備拡充を図った。動物舎整備に合わせゾウの輸入手続きも進められた。私は当時この事業に携わっていたので思い出は様々だ。成田空港で2頭の子ゾウを出迎えた時の光景を今でも思い出す。

本題の前にゾウの動物雑学を少々。誰もが抱くゾウのイメージは、詩人まど・みちおさん（故人）も童謡「ぞうさん」で取り上げているあの長い鼻と巨体、その進化を考えてみたい。

ゾウは植物食性動物として進化した動物だ。同じ植物食性のウマ類は蹄を発達させて卓越した移動能力を身に着けたほか、ウシなどは特異的な複胃による反芻機能で食べた草を効率よく消化吸収できる能力を発揮し、世界に広がった。一方、ゾウはウマやウシのような特異的な能力を持たなかったので、地面の草から森の木や枝葉、時には木の皮から根まで何でも多量に食べ、生き延びる道を選んだ動物だった。多量に食べるため胃袋等は大きくなり、体も大型化し、エネルギー効率が高まり、寒さにも強く、さらに他の動物から襲われることも少なくなった。

だが、体の大型化で課題も生じた。背が高くなるにつれて、地面の草を食べるための頭と頸も長大化させると重くなってしまふのだ。その解決策としてゾウは食べるための鼻先と上唇の両先端だけを残し、頭と頸部を短縮させ軽量化させたのだった。原始ゾウの頭は馬のように長

かったが、体の大型化で重くなる頭頸を軽量化するため、食べるための道具として鼻と上唇の先端だけを残したのだ。ゾウの鼻は食物を口に運ぶために不可欠なもの、英語で“trunk”と表現され、実に器用で仲間とのコミュニケーションにも欠かせない。生きるための動物、いのちの知恵は合理的で不思議で興味は尽きない。

話を子ゾウの思い出に戻す。アフリカゾウはワシントン条約で国際取引が制限され、かつ輸入予定の子ゾウの病気発生など輸入手続きでは随分翻弄された。ようやく許可が出て、成田で子ゾウを出迎えることができたのが1990年の秋だった。

荷下ろしヤードに案内され、そこで出会ったときの光景を思い出す。二つのゾウ輸送箱は他の荷物とは別扱いとして離され、広いヤードにポツンと並べられていた。箱の高さは大人の背丈より低く、「子ゾウ」の認識はあったが、「ゾウ」のイメージからすると可愛いくらいで少し拍子抜けしたのを覚えている。箱には大人の掌くらいの蓋付きの視窓があった。

対面した2頭の子ゾウ、後に「だいすけ」と名付けられた雄には特別な思い出がある。中が暗く、視窓からはだいすけの姿がよく見えなかったが、特有の匂いでその存在を知ることができた。私が視窓に顔を近づけた時、だいすけは得体の知れぬものを探るように鼻先を出し、探索を始めた。私が「疲れただろう」と鼻先に触れると、びっくりして鼻をさっと引っ込めたが、すぐにまた鼻を出し「あなたは誰？」と話しか

けるように私の手をまさぐってきたのだ。鼻に疎らに生えている柔らかそうな毛先は意外に硬く、今でも手がチクチク刺激された感触を思い出す。南アフリカからの長旅、異国の空気感、匂い、知能の高いゾウ、だいすけは子ゾウだけに心細く感じていたに違いない。

元気に到着した2頭の子ゾウたちは、トラックに載せられ陸路で秋田に向け出発、私はその受け入れ準備のため別便空路で一足先に秋田に戻った。

2頭が秋田に着いたのはその日の夜中だった。新ゾウ舎が未完成であったため、子ゾウたちはラクダ舎を改造した一室に収容された。ユニック車をラクダ舎の部屋まで近づけることができないことがわかり、鉄パイプを地面にコロとして敷き、重い箱を動物園の皆が人力で部屋まで押した。ユニック車に装備された計測器はゾウと箱込みで重さ700kg超えを示した。子ゾウは一頭約400kgだった。

部屋の入口に輸送箱の出口を向け、落とし扉を上げたが、子ゾウ達は警戒しすぐには出て来なかった。未経験のラクダの匂い、様々な人の声、子ゾウたちは未知の世界が怖かったのだ。我々は子ゾウたちの自発的な動きを静かに待った。しばらくすると鼻を出し、匂いを探り、恐る恐る片足を出すと2頭は一気に箱の外に出た。柵越しに果物等を与えようとしても、子ゾウたちはそれどころではなかった。人の急な動きに反応し耳を広げるなどの緊張状態が続いていた。不安と怖さが先にたっていたのだ。

私がゾウに「大丈夫だよ」とバナナを差し出しても中々近づいてくれなかった。粘り強く待った。しばらくの間、子ゾウたちと人の膠着状態が続いたが、だいすけが私の方々にじり寄り、伸ばした鼻で私の手をまさぐり始め「さっきの人？」と探ってきたのだ。私は手を握り、だいすけの動きに委ねていると、鼻先で手を巻きながら口の中に引き込み、分厚い舌で私の手

をしゃぶり始めた。それは何かを求めているサインだったのだ。南アフリカからやってきたのは子ゾウたち、体重からしてまだ1歳くらい、お母さんのお乳が欲しい年齢だったのだ。

子ゾウたちは南アフリカで悲しい経験をしてきたようだ。当時アフリカでは象牙を得るための悲しい密猟が各地で盛んに行われ、それは母ゾウにも向けられていた。親を亡くした子ゾウの保護収容施設が各地にあったようだ。

秋田にやってきた2頭の子ゾウたちもそんな悲しい経験をしていたのだろう。私たちはお乳を欲しがる子ゾウたちに、果物や柔らかい草の他にゾウの乳成分に近い馬用人工乳をヤカンで飲ませた。時とともに子ゾウたちは飼育員をお母さんのように慕うようになっていった。

翌春、新ゾウ舎の完成に合わせて子ゾウたちが展示されると、2頭はすぐに動物園の人気者になった。市民は雄には先に紹介した「だいすけ」、雌には「花子」と名付けてくれた。その後、2頭はぐんぐん成長し大森山の顔的存在となり、動物園づくりに大いに力を発揮し続けてくれた。

「ゾウさん堆肥」がつくられ、それは学校での飼料作物栽培授業に発展。だいすけが夜の動物園で見せた「ゾウのスイカ割り」はファンを大いに喜ばせた。また、希少アフリカゾウの繁殖プロジェクトにも関わってくれるなど、様々な動物園活動の主役的役割を果たし続けた。ゾウ舎の前で母子が童謡「ぞうさん」を静かに歌えば、だいすけは二人に近寄り、その歌に合わせて長い鼻を揺さぶってみせた。

だいすけはその後、年齢とともに後脚に課題を抱えるようになり、飼育員と獣医師の懸命のケアで何度も危機を脱したが、2021年の春、突然倒れ、花子を置き逝ってしまった。ファンの心には大きな穴が空いた。献花台に花を手向ける母子の姿を見て、だいすけは多くの人に大事なものを残してくれていたように思えた。だいすけは実にやさしいゾウだった。